

「音楽力」を読んで

- 自然の中でのサウンド・オブ・サイレンスこそ、音楽！ -

先に当 HP で「やりとりは、共鳴、共振し合う関係（「雑学」バックナンバー；メル友・コメント等関係（ ） P 2005. 4.30.：参照）」を記載した。

最近、患者や障害児に音楽療法の効能がよくいわれているが、共鳴、共振は正に音楽の大事な要素でないかと思ひ、音楽療法とコミュニケーションの問題はどこか共有し思考できる論がないのかなあと、ふと思った。

そこで、音楽療法を知るには、本丸を攻める方が原理・原則を明快に解るのでないかと思ひ、日本音楽療法学会理事長：日野原重明と、日本作詞家協会副会長：湯川れい子の対談をまとめた書籍「音楽力」が目にとまったので、早速購読した。

期待に違わず、みごとにまでに書籍に、共鳴、共振という語彙が何度も出てきた。正に、音楽療法とコミュニケーションの問題は、同じ問題であるよう。

言葉以上に、音楽には「同質の原理」が働き易いという。つまり、人の心の状態（感情）や変化に伴って、共鳴、共振（寄り添う）することが大いにあるということのよう。それだけに、その人により、その時の感情により好む音楽は当然違って来る。

しかし、その人の感情に寄り添う要素が音楽にあるからこそ、人は感情の上で居場所を感じる、つまり、癒されるよう。確かに、人は癒され、居場所があってこそ、楽しく生きたい、頑張りたいと思うもの。

だからか、ある曲を聞いたり、ある絵を見て癒されたとか、元気を貰ったという話は、結構耳にする。

ただ、その人のその時の感情に適切な音楽を選択し、また、感情表出を援助する音楽を即興的に応じる能力を必要とする音楽療法士には、（音楽的）知識、テクニック（演奏技術）、（患者の気持ちへの）タッチという三要素が必要という。特に、その人の心を読んで即興的に歌や演奏で応じるタッチは、誰にでも出来ることではない。

それだけに、日野原先生は、音楽療法士の養成と国家資格制度を、国に強く働きかけているようである。

ご承知のように、聖路加国際病院の理事長の日野原先生は Dr であるだけに、医学的側面からの音楽療法の効能を、色んな症例を科学的側面にも触れながら紹介している。

また、湯川さんは、呼吸のリズム、心臓の鼓動そのものがリズムであるように、人は本来音楽的要素とつき合ってる存在であり、また、乳幼児と母との係わり合いには、如何にたくさんの音楽的要素が含まれているか、更に、そうした要素ある係わり合いが、如何に大切かにも触れている。

（2005年5月9日 記）